

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	<p>対象住民の「生活の質の改善」という上位目標達成に向けて順調に進捗している。「生活の質の改善」は、教育機会に加え、安全な飲み水へのアクセス、病気への耐性、安定した収入源など、生活向上に関連するとみられる複数項目を総合的に捉えて定義している。</p> <p>5項目設定しているそれぞれの成果も順調に発現してきている。すでに読み書きができる住民は、図書館を利用し、農業や保健衛生などの書籍を読み、学んだ知識を生活向上に役立てている。読み書きができない住民は、識字教室に参加し、カリキュラムに沿って多岐にわたる生活向上の基礎知識についての座学を通して、その礎となる読み書き計算を習得している。¹ また、本事業の識字後プログラムは、対象地域の識字状況からプログラムの意義を柔軟に解釈し、識字の習得のみに固執せず、生活向上のための「実体験」を重視した研修を開催している。これにより、識字が苦手な住民も生活向上に役立つ実践的な知識、技術を学び、その後、多くの参加者が、農作物の収穫量増大など、実生活の向上に結びつけている。このような研修参加者の多くは識字学習者であることもあり、本事業において、識字学習と生活向上に直結する体験学習（農業、保健衛生など）の融合が進んでいる。言い換えると、図書館、識字・識字後プログラムが1つの枠組みの中に統合され、これらの活動が互いに相乗効果を生み出しているといえる。</p>
(2) 事業内容	<p><u>1) 地域学習センター（CLC）設立及び運営指導</u></p> <p>2年次に計画されていた活動はほぼ予定通り完了した。3館目サンコー（CLC#3）は、住民代表計11名（運営委員会メンバー8名、センター職員3名）を対象に初年度の運営能力強化研修が完了し、5月から開館した。建設と平行して、4館目コークバラ（CLC#4）では最終的に計10名（運営委員会メンバー6名、センター職員4名）、5館目オープラサット（CLC#5）では最終的に計12名（運営委員会メンバー7名、センター職員5名）を対象に初年度の運営能力強化研修が完了し、ともに11月から開館した。</p> <p>事業開始から2年目にあたる1館目ニーペック（CLC#1）、2館目ロンコー（CLC#2）においては、日常の業務について実地訓練を続けたが、担当者自らが運営向上についての案を考え、それを実践に移していくことなどが困難で、住民による自立運営にはまだ課題が残る。</p> <p>6月よりCLC#1～3で識字教室が開始以降、3館にて図書館も夜間運営を開始した。開館中、識字学習者が図書館員や成人利用者に子どもを預け、授業に専念できるよう計らった。夜間に識字教室が始まったことに加え、そもそも青年・成人利用者は日中、仕事や家事で忙しく、夜間しか自由に使える時間がないこともあり、試験的にCLC#1には太陽光発電機器と照明機器を図書館・コミュニティホールに設置、夜間の運営体制を強化した。その結果、CLC#1での青年・成人層の利用が増加した。</p> <p><u>2) 識字教室を通じた基礎スキル（読み書き・計算）の提供</u></p> <p>教育省の都合により識字教室の開催に遅れが生じたものの、2年次に計画されていた活動はほぼ予定通り完了した。3月には教師の教室運営能力を強化するため、当国で識字事業に長年の実績を持つカンボジアに学校を贈る会（ASAC）の識字教師のトレーナーにより、CLC#1～5の識字教員5名を対象に、成人に対する識字教授法の研修会を実施した。教育省の予算支払いの遅れから、識字教室の開催が2ヶ月遅れたが、6月から12月の7ヶ月、週6日、夕</p>

方の2時間、CLC#1～3で生活向上の基礎知識を学びながら読み書き計算を習得する識字教室が開催された。教育省が支給するはずの教師の給与、教材、参加者の文具等は、計画より大幅な遅配が発生したほか、最後まで支給されないものもあったため、本事業で費用を捻出するなどして柔軟に対応した。CLC#1では識字教室受講者25名(全員女性)中、23名が修了、CLC#2では25名(女性20名、男性5名)中、24名(女性19名、男性5名)が修了、CLC#3では22名(女性20名、男性2名)全員が修了した。² また、昨年続き、成人向け識字教材の2作品目(環境教育の絵本)を制作した。

3) 識字後プログラムの改善、構築・拡充

2年次に計画されていた活動はほぼ予定通り完了した。今年前半は、CLC#1、2と、今年5月に開館したCLC#3にて、住民による生活向上研修の定期開催を支援した。生活向上のためには、本からの知識だけでなく、「Learning by Doing」(体験学習)が必要との考えから、これまで専門家の研修を受けた地域住民が講師を務め、その他の住民に対して、野菜栽培、養鶏、稲作、母子保健、改良かまど制作、についての研修会が開催された。

別途、6月には昨年続き、国内の農業事業で成功を収めているローカルNGO、CEDACとの協力により、稲作研修を実施した。CLC#1～3の農家合計20名を稲作の農業普及員として育成した。これ以降、この農業普及員が地域の人的資源として学んだ稲作の知識・技術を他の住民に伝え、対象集合村全体に普及させるべく、それぞれのCLCで生活向上研修会の講師を担当した。

加えて、生活向上研修の新しいトピックとして「美容」のプログラム(やしの葉を使ったパーマのかけ方)や少ない薪で短時間に火をつけることができる「ロケットストーブ」の制作を一部のCLCで試験的に実施した。

今年度後半からはCLC#1～3にて、World Visionを筆頭に他団体による地域の住民を対象とした、農業、母子保健、栄養、環境教育、貯蓄グループ、野菜栽培、伝統舞踊、英語教室、リーダーシップ育成、など多岐に渡る研修も実施された。このように、本事業がカンボジア国内で注目を集めるのに比例して、本事業のCLCにおける他団体の活動が活発になった。しかし、センター職員・運営委員会が中心となって生活向上研修の定期開催を行うことと他団体からの支援調整を行うことに課題が残った。

4) 対象集合村にて地域学習センター(CLC)に対する認知度の向上

2年次に計画されていた活動はほぼ予定通り完了したが、センター職員、運営委員会が主体となってCLC広報活動を行うことについて課題が残った。CLC#1と2では、CLCや寺院など村内の公共施設でのイベント開催時に、運営委員会・センター職員が中心となってセンターの推進活動を行ったが、#2では住民主体で行うことに難がある。CLC#3～5では住民主体でこのような推進活動は行えていない。CLC推進ポスターについては2作品を制作中であったが完成せず、翌年に持ち越した。

成人住民のCLCへの呼び込みには、年度途中から「2段階戦略」を採用した。対象地の成人住民の多くは、教育に対して過去の経験から苦手意識とステレオ

¹ カンボジア教育省のよる識字プログラムは、ただ読み書き計算を学ぶだけでなく、7ヶ月間のコースの中で、保健衛生、農業、貯蓄、起業、行政サービスの利用などの生活向上の基礎知識を含む、20章以上のテーマを題材にしながら、段階的に読み書き計算が習得できるよう工夫されている。

² 詳細はブログ記事参照：<http://sva.or.jp/wp/?p=17106>

	<p>タイプを持っており、一般的に、教育レベルの高い住民を除き、センターの敷地に足を踏み入れることでさえ精神的に苦痛なことのようなのである。対象地域の成人は、小学校未修了者、および読み書き計算に不安がある住民ともに8割を超え³、教育に対して「堅苦しい、つまらない、自分は対象外」という意識を持っている。このような住民を呼び込むには、まず住民の教育に対してのステレオタイプを打破する必要がある。そのため、第一段階として、住民の時間のある夜の運営体制を強化し、CLCで住民が好むスポーツや文化活動などを行えるようにし、まずCLC施設に足を運び、親しんでもらうよう努力した。その後の第二段階で、上記の親しみやすい活動と、識字教室などの教育活動をつなげ、段階的に利用者を教育活動に引き込んでいくことを狙っている。</p> <p>5) 関係局・団体・組織間のネットワーク構築</p> <p>2年次に計画されていた以上の活動を実施した。教育省主催のノンフォーマル教育作業部会、並びにCLCミニマムスタンダードガイドライン制作作業部会、NEP⁴主催のノンフォーマル教育作業部会など、当国のノンフォーマル教育、CLCについての最重要会議に参加し、本事業からの経験や成果を随時共有した。今年度は本事業の成功から、教育省や関連団体との関係構築の域を越え、当国のノンフォーマル教育分野の主導的役割を担い、本事業のCLCモデルの浸透を図る政策提言が主な活動となった。</p>
<p>(3) 達成された成果</p>	<p><u>1) CLC委員会・職員・行政担当官を対象に、コミュニティによる運営自立化のための能力強化がされる</u></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【指標】(ア) 委員会が独自に運営費用を調達できるようになる (教育省負担分の「センター所長給与」と「識字教室運営費」(識字教師給与と生徒の文具費)を除く) 1年目: 30%、2年目: 60%</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【現状】一部達成</p> <p>CLC#1を除いて指標を達成した。年間運営費用およそ\$1,000のうち、\$600(\$50×12ヶ月)は図書館員への給与であるが、CLC#1、2ともに、この給与の集合村予算へ計上されることとなり、4月からは集合村行政から給与が支払われている。加えて#2では、教育省からの識字教師の給与遅配のため、別途、\$400(\$50×8ヶ月)を集合村行政からも支払った。#3~5は、建設の盛土代にそれぞれ\$2,750、\$5,000、\$6,000を拠出した。なお、各CLCでは、日々の運営に細かい物品の購入や修繕費などの諸経費を支払っているようだが、1年を通していくら使っているのかははっきりした金額がわからないため、これらは考慮していない。</p> </div>

³ 2014年度CLC#1~3ベースライン調査結果より。

⁴ NGO Education Partnership。教育省の政策に対して大きな影響力を持つ、当国の教育支援団体ネットワーク。

CLC運営費用調達状況

CLC	# 1	# 2	# 3	# 4	# 5
運営期間 (今年度 12月末 時点)	15ヶ月	13ヶ月	8ヶ月	2ヶ月	2ヶ月
指標 達成状況	2年目指標：60% (\$600)		1年目指標：30% (\$300)		
	未達成 45% \$450 図書館員 給与 \$450 (\$50× 9ヶ月)	達成 85% \$850 図書館員 給与 \$450 (\$50× 9ヶ月) 識字教師 給与 \$400 (\$50× 8ヶ月)	達成 275% \$2,750 建設盛土代 \$2,750	達成 500% \$5,000 建設盛土代 \$5,000	達成 600% \$6,000 建設盛土代 \$6,000

【指標】(イ) 委員会が独自に地域からニーズを拾い活動に反映できるようになる

1年目：当会職員同伴で、月例会議を定期的実施している

2年目：指導付で実施している

【現状】達成

CLC#1、2については、当会職員の主導で地域からニーズを拾い活動に反映しているが、住民主導で行うのはまだ難しい。CLC#3～5は月例会議を定期的開催した。

【指標】(ウ) センター業務・活動が計画の8割以上実施できるようになる

1年目：計画時から当会職員の指導付で8割以上実施している

2年目：計画は当会職員と作成するが、活動は指導なしで8割以上実施している

【現状】一部達成

全館について、前年度に次年度の活動計画を作成するという作業ができていないため判断が難しいが、運営日程については全館、午前と午後週5、6日開館し、計画通りのほぼ100%を達成している。生活向上研修会の月例会議開催とセンターの推進イベントの隔月開催については、今年度下半期から支援CLCが5館になったことから、業務過多で開催が不定期になり、年間を通したCLC#1～3の平均開催率は50%となった。

CLC定期活動開催状況

	# 1	# 2	# 3	# 4	# 5	平均 (#1~3)
生活向上研修 開催回数 【毎月】 (実際/計画)	5/12 回 42%	5/12 回 42%	2/8回 25%	0/2回 0%	0/2回 0%	36%
CLC推進 イベント 開催回数 【隔月】 (実際/計画)	5/6回 83%	5/6回 83%	1/4回 25%	0/1回 0%	0/1回 0%	64%
平均	63%	63%	25%	0%	0%	50%

2) 識字教室を通して、対象集合村の貧困世帯が基礎スキル（読み書き・計算）を習得する

【指標】(ア) 教育省の識字能力試験に受講者の8割が合格できている。

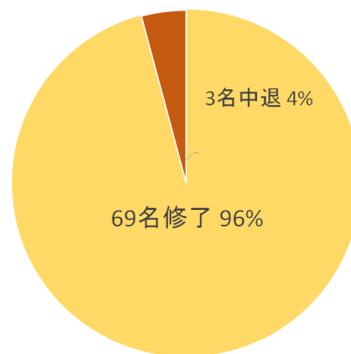
1年目：6割、2年目：7割

【現状】事実上達成

通常、教育省が本来すべき識字能力試験の採点を行わず、教室修了者を全員試験「合格者」とみなしており、今年度の修了率は96%であったため、事実上達成とした。

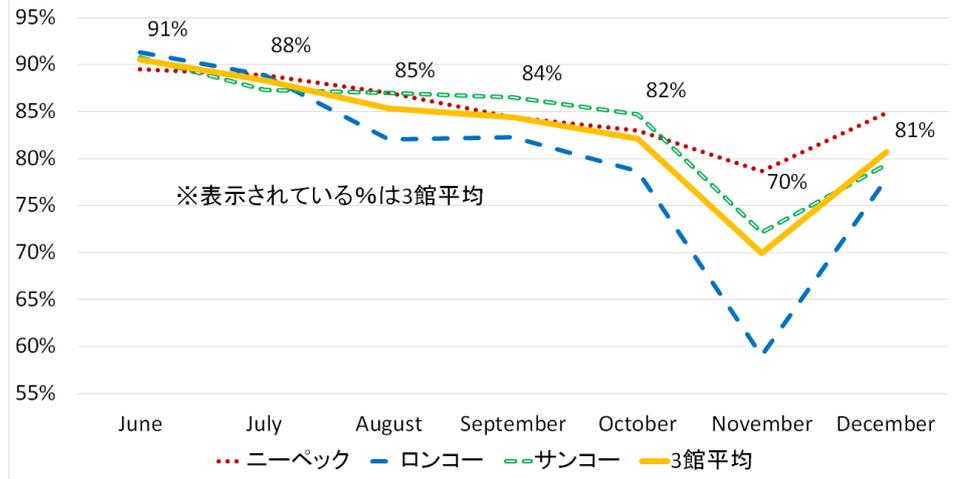
2015年識字教室 成果

CLC3館で72名が参加



今年度の識字教室は、CLC#1~3合計で72名参加、3名が出稼ぎや家族の看病などの理由で中退したものの、69名が修了した（修了率96%）。修了した参加者69名の7ヶ月間の日々の平均出席率は83%であった。11月に出席率が落ちたのは、教育省の都合で2ヶ月遅れて教室が始まったため、本来なら重ならないよう配慮されている農繁期と重なったことによる。この事態に早急に対応するため、当会職員が教室に赴き参加者を説得するなどしたことで、農繁期が続く12月であっても出席率を回復させることができた。

2015年識字教室 平均出席率推移



今年度、「万人のための教育」の最終年であるため、教育省は識字教室に関する公式データを公開したが、当国の識字教室の実態からかけ離れており信憑性に乏しい。⁵ 対象地域の郡教育局職員からの聞き取りによると、当国の識字教室は、教室への「登録」実績を伸ばすため、各集合村行政が勝手に住民の名前を登録させることなどが慣例となっている。そのため、教室が始まっても参加者が来ない、最初は来てもすぐに誰も来なくなり閉鎖するという事例が多く報告されている。一般的に日々の平均出席率は2割前後、修了率は5割に満たないようである。⁶ 本事業の識字教室データを教育省のCLC担当に共有したところ、修了率・出席率ともに「驚異的」と賞賛された。

【指標】(イ) 受講者の8割がコースを完了する。2年目：7割

【現状】達成

同上。3館で修了率96%を達成した。

3) 対象集合村の貧困世帯が生活改善ための知識を習得する

【指標】(ア) 講義参加者の8割が、習得した知識・技術を生活改善に活用している(インタビュー形式で図る)

1年目：6割、2年目：7割

【現状】一部達成

本事業1年次に、CLC#1、2にて合計44名を対象に野菜栽培、養鶏の農業普及員を育成するための研修会を開催し、今年度6月にその活用状況を調べたところ、このうち68%が習得した知識・技術をすでに生活改善に活用していると回答した。

しかしながら、CLC#1～3合同で6月に稲作の農業普及員を育成するための研修会を開催し、その後の利用率を調べたが、ほとんどが習得したことを活用していないことが判明した。そのため、この稲作研修を含めると、これまでCLC#1～3で合計55名の農業普及員候補の育成研修を実施し、このうち50%しか習得した知識・技術を生活改善に活用していないとの結果となった。

⁵ 詳細は小冊子参照：http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/FIELD/Phnom_Penh/pdf/nlc_flyer_en.pdf

⁶ 出席率に対して修了率が高いのは、実績を伸ばすため、そもそも読み書きができる人も登録されている疑いがある。

CLC#1～3農業普及員候補 習得知識・技術 利用状況 (2015年6月 参加者合計55人聞き取り調査より)								
	野菜栽培		養鶏		稲作		合計(※延べ)	
研修人数	22		22		20		64	
習得した知識・ 技術を生活改善 に活用している (人数)	13	59%	17	77%	2	10%	32	50%
習得した知識・ 技術を生活改善 に活用していな い(人数)	9	41%	5	23%	18	90%	32	50%

稲作の農業普及員候補が、習得した知識・技術を生活改善に活用していない原因は、調査時には田植えの時期となる雨季の到来が例年より遅れていたことに加え、学んだ農法（SRI：稲集約農法）は伝統的な農業とは大きく異なることから、研修参加者は試すことさえ恐れていることにあった。通常、SRI農法の導入には、研修前に対象者を同農法普及地域へのスタディツアーに案内し、導入成功農家との意見交換の場をつくるなど、より丁寧な対応をしていることがわかった。この教訓は次年度に生かす。

なお計画時、本指標の測定に各CLCで一般住民を対象に開催されている生活向上研修の参加者からの聞き取りを想定していたが、研修から一定期間おいた後の不特定多数への聞き取りと、その全館分のデータ集計・分析を続けるのは非現実的と判断し、代替指標として、各CLCで育成されている農業普及員候補を対象に聞き取りしたデータを使用している。

4) 対象集合村にて地域学習センター（CLC）に対する認知度が向上する

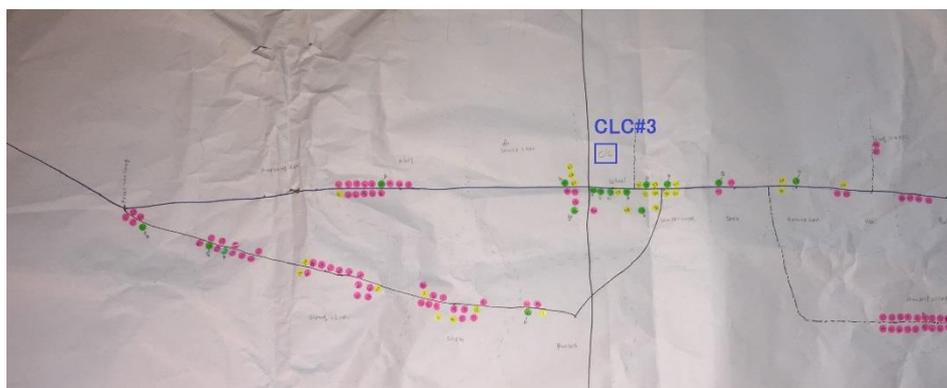
【指標】(ア) 対象集合村の住民の5割がセンターの役割及び活動を認知している 1年目：3割、2年目：4割

【現状】達成

CLC#1～3対象地域平均で、66%の住民に認知されており、このうち38%の住民は実際にCLCを利用した経験がある。CLC#1、2に限ると認知度は88%にもなる。CLC#3は対象地域の広さだけでなく、これまで十分なCLCの広報活動ができていないため、認知度が低い。想定していたとおり、CLCから住居が離れるほど、利用も少なくなり、認知度も落ちていくことが調査にて確認された。これを踏まえて、次年度は#3での認知度向上に力を入れる。

CLC#1～3対象地域内 認知度
(2016年1月 無作為抽出サンプル調査より)

	CLC #1		CLC #2		CLC #3		合計	
回答人数	82		110		123		315	
CLCのことを知っていて、 利用したことがある<緑>	61	74%	42	38%	16	13%	119	38%
CLCのことは知っているが、 利用したことがない<黄>	15	18%	48	44%	25	20%	88	28%
CLCのことを知らない <ピンク>	6	7%	20	18%	82	67%	108	34%



CLC対象地域内 認知度地図 (※画像はCLC#3のもの)

5) 中央・州レベルにおいて、ノンフォーマル教育及びCLCのネットワークが強化される

【指標】(ア) 州レベルにおけるノンフォーマル教育作業部会発足の必要性が、中央レベルで認識される

2年目：当会職員が州レベル部会の必要性について中央部会で発表する

【現状】事実上達成

1年次申請書(3)事業内容に記載したとおり、成果5の最終目標は、「(本事業が目指す)CLCモデルケースの浸透を図っていく」ことである。この目的で2年次申請時に設定した指標がすでに意味をなさなくなるほど、今年度は当初の予定を大きく上回るかたちで本事業のモデル化が達成された。今年度は、当国のノンフォーマル教育で主導的な役割を果たした。ノンフォーマル教育についての政策を議論する、教育省主催「ノンフォーマル教育作業部会」では、ユネスコ、ユニセフ、NEP、EUに混じり、当会はNGOから唯一参加が許された団体として政策提言を行った。以下、中間報告に記載した成果は割愛し、その後の成果のみ記載する。

7月、本事業をモデルとして制作された「CLC ミニマムスタンダード」ガイドラインが、カンボジア教育省による省令で政策化された。図書館、多目的ホール、農業・保健衛生活動等、本事業の特徴となるアプローチが大幅に採用された。⁷ ユネスコや、NEPの熱心な広報支援もあり、本事業の中でもとりわけCLC#1ニーベックは、カンボジアの国家モデルとみなされるようになった。NEP制作のCLC推進ビデオにおいても唯一のモデルとして登

⁷ 詳細はブログ記事参照：<http://sva.or.jp/wp/?p=15526>

	<p>場するだけでなく⁸、その活動が1年で現地だけでも5本のTV番組で報じられた。</p> <p>12月、ESD（持続可能な開発のための教育）を推進している岡山市が、国内外におけるESDの先進的な活動を顕彰する「ESD岡山アワード2015」において、本事業が「グローバル賞」を受賞した。これにより、本事業はESDにおける世界モデルとみなされるようになった。⁹</p>
<p>(4) 持続発展性</p>	<p>これまでの当会の政策提言の影響で、教育省は今年度からCLCに、1. 新しい建物を造る、2. 運営スタッフにインセンティブを払う、3. CLCに年間の運営費を出す、ことを決定している。以前は古い建物の使用のみで、運営スタッフは全員ボランティア、年間の運営費は教育省からは支出されなかった。NGO支援中は2と3は申請できないが、地域コミュニティと教育省にハンドオーバー後は受給可能で、これは本事業支援CLCの持続性を高めることに貢献する。CLCの持続性を高めることに貢献する。</p> <p>また、上述のとおり、本事業をモデルとして制作されたガイドラインは教育省の省令により政策化され、これから開設されるCLCは設立時からガイドラインを満たすことが求められる。すでに開設されているCLCは（教育省、NGO運営問わず）2年以内にガイドラインに沿い、認証を受けることが求められている。これは、この事業の成果が今後、当国に存在するすべてのCLCに波及していくことを意味する。CLCに波及していくことを意味する。</p> <p>さらに、ESD岡山アワード2015においてグローバル賞を受賞したことにより、今後、事業の成果がカンボジアを越え、世界に波及していくことが期待される。これは、本事業の成果が世界のCLC、ノンフォーマル教育のあり方に新風を巻き込み、その結果として、ノンフォーマル教育で学ぶ機会を求められているすべての人たちの暮らしや生き方に貢献する可能性を示している。</p>

⁸ 詳細はブログ記事参照：<http://sva.or.jp/wp/?p=15745>

⁹ 詳細はブログ記事参照：<http://sva.or.jp/wp/?p=15904>、<http://sva.or.jp/wp/?p=16250>